

2016 10 / 18 第21号

ふくしま 再生 短信



収穫米の脱穀作業報告

【写真上】佐須滑・菅野宗夫さん田圃の実験田から収穫した稲の棒かけ群。【写真右上】周辺のコスモスとヒマワリ畑から。

※ 豊 の 秋 ※



唐箕（とうみ）

農具の一つ。穀物に混ざった秕（しいな：からだだけで中身のない穀物）・籾殻・藁屑などを除去するもの（『広辞苑第6版』）。大陸から伝わり、伝統的には木製。江戸期から構造は変わっていない。上の写真は菅野永徳さんから借りた金属製のもの、手回しで風を送る。種もみは手前に藁屑は左のほうに落ちる。

2016年10月15日と16日の両日、久しぶりの快晴に恵まれた佐須の田圃で前週の小宮に引き続いて実験田からの収穫米の脱穀作業が行われた。めでたいことに今回の実験田からの収穫米には、「酒造好適米」もしくは「醸造用玄米」と呼ばれ酒米（さかまい）が含まれている。

目的別に分類コードがついた籾を順に脱穀してゆく。再生の会では今年足踏み式の伝統的な脱穀機を導入した。小宮では大久保金一さんが片足で脱穀機のドラムを回転させながら手際よく作業を進めていた。だが未経験

者には一人の作業は難しい。大半は一人がドラム回転用のペダルを踏みもう一人が稲の束を脱穀機のドラムにあてがい作業を進める【写真右】。写真では白いカバーの下でドラムが回転している。とれた種もみが外に散



らないようにゴザで覆いをしている。問題は種もみと一緒に出てくる大量の藁屑の処理である。始めのうちは「ふるい」による手作業で延々と藁屑をとっていたのだが、ハウス作りチームの情報で菅野永徳さんの所有する唐箕という便利な道具あることが判明した（困



み記事参照）。作業効率は一気に十倍以上に。それでも唐箕の作業に種もみを引き渡す前に大きな藁屑を手作業で取り除いた

【写真左】。こうして二日間計8人の奮闘で佐須田圃の棒かけ群

の稲も全て片付いたことは言うまでもない。

（文責&撮影・若林一平）

ふくしま

再生 短信

飯舘村山津見神社 復元天井絵奉納完成

見 守 る オ オ カ ミ



【上の写真】復元した天井絵を拝殿内でみる。



2016年10月16日午後、理事長の田尾陽一さんを始めとするふくしま再生の会のメンバーが天井絵の復元を終えた山津見神社を参拝した。権禰宜（ごんねぎ）の加藤啓介さんが出迎えた【写真左】。3

年前に焼失した237枚に新たに5枚を加えた242枚のオオカミ天井絵が、三井物産環境基金の助成を得て、和歌山大学の加藤久美さんとサイモン・ワーンさんのデジタル調査記録をもとに東京藝術

大学准教授・荒井経さんと院生たちの手により蘇り、福島県立美術館での公開展示のあと9月に山津見神社への奉納を終え復元した。再生の会は天井絵の被災直後から氏子総代の菅野永徳さんと共に天井絵の復元事業の企画調整の一端を担ってきた。古来より村民の生活を見守ってきたオオカミたちのさまざまな生き様が拝殿を

充たし息づいている【写真右】。



ふくしま 再生 短信

1 0 / 2 3 これから 5 年 飯 館 村 村 民 の 思 い

まこと

真の文明は山を荒らさず川を荒らさず 村を破らず人を殺さざるべし 田中正造

2016年10月23日午後3時、東大農学部弥生講堂アネックスで、ふくしま再生の会第13回活動報告会『これから5年 飯館村村民の思い <過去に学び未来につなぐ創造的協力を>』を開催。会合は東大農学生命科学研究科アグリコクーン農における放射線影響FG共催、飯館電力株式会社と公益財団法人渥美国際交流財団の後援を得て実現した。討議は円卓形式で理事長・田尾陽一さんの司会で進行した。

最初に宗夫さんから「2011年6月6日以来多くの

人びとの参加に感謝。ヨコの連携はこれからの5年を考える上で大きい意味がある」との挨拶に続いて、喫緊の5テーマについて活発な意見交換。●百姓・牛飼い：山田猛史さん「一貫事業目指して息子は肉屋自分は牧場に取り組む」、小林稔さん「肥育牛をやってみたい、安全な牧草が課題」、高橋日出夫さん「ハウスの切り花、来年7月から出荷できそう」、佐藤文雄さん「芍薬出荷が夢」、福島県農林企画課主任主査の戸城和幸さん「牛飼いを応援したい」●山林と自然エネルギー：小林稔さ

ん「太陽光40ヶ所稼働目指す」、菅野啓一さん「居久根を再生し孫達が故郷に帰れるようにしたい」、飯館村復興対策課長中川喜昭さん「森林の再生を重視している」●健康に生きる：田尾さん「個人線量計の運用と健康見守りに原爆手帳のような形を考えてよい」、菅野永徳さん「見守りはコミュニティ再生から、山津見神社の存在大きい」、菅野栄子さん「仮設の生活、よっちゃん（菅野芳子さん）と一緒に生きてきた、一緒に村に帰ります」●再除染と長泥地区の今後：地区長の嶋原良友さん「『もどれない故郷ながどろ』を出版、つながり・悲しみ・喜びがつまっている」、小原壮二さん「長泥の再生に向け空間線量と積算線量の測定継続しています」●これから5年：菅野義人さん「帰村率を上げる政策が必要」、菅野クニさん「知識は生活を楽しむ武器になる」◆まとめ：宗夫さん「帰る・帰らない、互いにみとめあうことも大切」、田尾さん「自然と人間の共生の再建に田中正造の言葉（本号標題）を想起したい」。

（撮影・文責：若林一平）



10/23詳細報告書は近日中に完成します。ご期待ください。

ふくしま 再生 短信

9 / 24 野草班 調査 同行 記



【中央写真】クリイガのサンプル。

【右段写真上から】北側ゲート近くから福島第一原発を望む。鳴原邸でアケビ採集。自宅を改築中のAさん宅に集う再生の会のメンバーたち。

【左段写真上から】浪江町側の「分断」ゲート。鳴原邸内の線量モニター。サンプリング作業中の野草班。

✕ 長泥の人と自然 ✕

長泥地区は飯館村最南端にあり、いわきから山形県南陽市へ南北に走る国道399号線と二本松から南相馬に至る県道62号線とが丁度交差する「戦略上の要衝」に位置する。飯館村20の行政区の中で唯一「帰還困難区域」に指定されている。

2016年9月24日午後1時27分、記者は野草班（チームリーダー：森本晶子さん）に同行して長泥地区に入った。帰宅困難区域は住民を除いて入場はみとめられていない。この日の調査は長泥地区への情報提供を目的しており、区長の鳴原良友さんの好意により実現した。野草班は村内のコケ、果実、野草などの植物全般の観察・記録・採集・放射能調査を継続してきた。放射線モニタリング（チームリーダー・小原壮二さん）

を既に実施している鳴原邸から資料採集を開始。たわわに実ったアケビが印象的だ。地区内を回って1時間、感動の出会いが待っていた。

「Aさん」という男性が自宅の改築作業を地道に続けていた。先祖は戦時中に空襲で疎開してきた

「新住民」とのこと。「帰宅困難」の中で真っ直ぐに生きている。地区の南端で浪江町との境界のゲートに達した。長泥のゲートの内にいると思っていれば浪江のゲートの外にいた。

内と外がこんがらがって何とも奇妙な錯覚にとらわれた。宗夫さんはゲートを「分断の象徴」と呼ぶ。分断に次ぐ分断が進行していた。蕨平に通じる東側の無人ゲート前を經由して約束の午後4時に339号に通じる北側ゲートから退出した。

菅野千恵子さんは野草班の一員としてこの間活躍中であり、この日も力強い応援者として同道していたことを特記しておきたい。（文責&撮影・若林一平）



トヤマシノブゴケ



鳴原さん（10/23東大）



74世帯281人の思いを綴る。長泥記録誌編集委員会編、芙蓉書房出版、2016年刊。

2 0 1 7 1 / 3 1 第 2 5 号

ふくしま

再生 短信

ち り よ く

地 力 回 復 へ

全 村 田 圃 土 壌 測 定 プ ロ ジ ェ ク ト 同 行 記



【写真説明】測定点はすべて番号付けされている（上）。巻尺を使用して正確な距離を決定し（下左）、決められた手順で試料を採集する（下中央）。最後に八木沢・芦原多目的集会所前で地区村民のみなさんと記念撮影（下右）。



2016年12月18日、飯舘村の事業として始まった全村田圃土壌測定プロジェクトに同行した。8時10分に佐須を出発して八木沢・芦原地区へ向かった。再生の会メンバーは

待ち受けていた地区村民の、和田正裕さん、西幸夫さん、大内勝美さんと合流して8時45分に作業を開始。本プロジェクトでは、役場



から受託している地点のほかには再生の会独自の調査も実施している。除染効果の測定に加えて将来の地力回復という農地本来の目標に向か

って進むためである。地力は農地が作物を生育する能力でその回復に向けた取組みは次年度以降に継続する。正午ちょうど予定した作業をすべて終了した。

（文責&撮影・若林一平）

